

研究ノート

広島青年教師が伝えた1912年ストックホルム・オリンピック

——広陵中学校教諭、藤重源が遺した「瑞典通信」をめぐって——

渡 辺 勇 一*

要 約

日本が初めて参加したオリンピックは1912年第5回ストックホルム大会である。急造の大日本体育協会はわずか4人の選手団（役員2、選手2）で編成した。明治のスポーツ黎明期とあって、2選手の成績に見るべきものはなく、惨敗であった。

初のオリンピックを視察するため、広島から自費でスウェーデンへ渡航したのが私立広陵中学の体育教諭、藤重源（ふじしげ・はじめ）だった。22歳の若い教師は朝日新聞特約通信員の肩書を手に入れて連日熱戦を見守った。この時、邦人記者は読売、大阪毎日の2人しかいなかった。

藤重は大会後、広陵中学校の校内雑誌「広陵」へ大会印象記「瑞典通信」を書き送った。11,000字に達するレポートは、オリンピックの壮さ、欧米選手の力感を伝える一方で、日本スポーツ界の未熟さを指摘し、体育思想普及の必要性を訴えた。

破天荒ともいえる行動に出た若手教師は帰国することなく、アメリカに渡り家族を得て永住した。戦中の収容所生活などを経て帰化し81年、91歳で死去した。

藤重の存在は34年前、筆者が中国新聞で記事化した¹が、本稿では改めて「通信」を詳述し、新たに判明した渡米後の足取りなどを加筆した。

1. は じ め に

ピエール・ド・クーベルタンが提唱した近代オリンピック構想は1896年、古代オリンピック発祥の地ギリシャ・アテネで開催された第1回大会で一歩を踏み出した。以後、4年に一度規模を増しながら順調に回数を重ねていった。

第4回ロンドン大会（1908年）までは万国博覧会の余興としての側面があり、参加国も欧米に偏り「世界スポーツの祭典」の趣は薄かった。万博とは無縁の1912年第5回ストックホルム大会は、純粋な意味で今日に通じるオリンピックのモデルタイプとなった。同時に、アジア極東の日本が初めて参加した大会として記憶される。とはいえ、オリンピック派遣団体のNOCたる

日本オリンピック委員会（大日本体育協会）が即席で結成され、代表選手は陸上競技の2人にすぎなかった。短距離選手は予選で失格し、もう一人のマラソン代表は途中棄権と成績に見るべき収穫はなかった。

このストックホルム大会取材した邦人新聞記者は2人であり、競技会に立ち会った在留邦人は外交官や視察・留学中の軍人ら極めて少数であった。その中に単身、スウェーデンに赴いた22歳の私立広陵中学校（広島市）体育教師、藤重源（ふじしげ・はじめ）がいた。「朝日新聞特約通信員」の触れ込みで渡航した藤重は大会後、同中学校の校友会雑誌「広陵」に詳細な大会報告記「瑞典通信」を書き送っていた。

藤重の存在は萬朝報記事を引用した浜田（2010）の論考¹に見え、熊本日日新聞社が連載し、その後出版したマラソン代表、金栗四三

* 広島経済大学経済学部教授

の評伝²⁾の中で触れているが、いずれも藤重の人物像を表現したものではなく、その場に居合わせた人物としての事実関係を描写したに過ぎない。第5回ストックホルム大会に関しては派遣母体である大日本体育協会の正式な報告書は作成されておらず、代表選手団当事者たちの講演談話や聞き書きなどが後世に残されているだけである。こうした中であって実際に競技を観戦し、日常的に2選手と接していた民間人の藤重報告は貴重である。10,000字超に達する「瑞典通信」はスポーツにおける日本の後進性を鋭く指摘し、今後の奮起を強く求めている。

藤重は大会後、校友会雑誌以外に観戦記を発表した形跡はなく、日本に帰国せぬままアメリカ合衆国に渡った。本稿では、藤重が書き残した「瑞典通信」を通じて、初参加したオリンピックでの日本選手団の反応や実態を明らかにするとともに、藤重の数奇な人生にも焦点を当ててみるものである。

2. スtockホルム・オリンピック

2.1 近代オリンピック開始

紀元前776年にギリシャ・オリンピアで始まった古代オリンピックは紀元後393年までの1169年間、最高神ゼウスへ捧げるため、4年に1度開かれた運動競技の祭典である。古代オリンピックの復興を目指したのがフランスの男爵ピエール・ド・クーベルタンであった。イギリスの教育制度などを調査していたクーベルタンは、イングランド地方のスポーツやゲームの実態に触れるうちに世界的なオリンピック復興運動の基盤を固めている。内海 (2012)³⁾ が指摘するように、クーベルタンは必ずしもオリンピック復興の着想者ではないが、構想を実現に移す実行力を持っていた。1894年6月、パリ・ソルボンヌ大学に13ヵ国、79人のスポーツに造詣の深い関係者を招いてオリンピック復興を提唱し、国際オリンピック委員会 (IOC) の創設が決

まった。近代オリンピックの第1回アテネ大会は2年後の1896年、14ヵ国、241人の参加で始まり、最終種目マラソンで地元ギリシャ選手が優勝するなど開催地としての面目を保った。

以後、オリンピックは4年に1度持ち回りで開催された。しかし、初期の大会はクーベルタンの理想としたオリンピズムの実現とは異なるものであった。第2回パリ大会 (1900年) には初めて女性選手が参加した。とはいえ、パリでは「国際体育スポーツ大会」と呼ばれ、地元ではオリンピックへの認識は希薄だった。開会式も閉会式もなく、パリ万博の添え物として扱われた。第3回大会 (1904年) 開催地は当初、米国シカゴが正式に決まっていた。ところが、ここでも万博との同時開催が優先し、一転セントルイスで行われた。5月から約5か月も続き、田舎町のスポーツイベントの趣であったという。参加NOCはわずか12、7階級で争ったボクシングはすべて米国選手という有様であった。第4回大会開催地ロンドンもまた万国博覧会とのセットで行われた。

2.2 大日本体育協会の創立

第5回ストックホルム大会 (1912年) の開催地は1909年5月のベルリンでのIOC総会で決まり、この席でアジア人初のIOC委員として嘉納治五郎・東京高等師範学校 (現筑波大学) 校長を選出した。当時の日本には、オリンピックの派遣母体である国内オリンピック委員会 (NOC) はおろか、スポーツ統括組織・団体すら存在しなかった。これより先の09年春、嘉納は駐日フランス大使ゼラールから面会を申し込まれた。ゼラールはフランスの高等師範学校同窓であるIOC会長クーベルタンからの依頼を伝え、オリンピック主催者であるIOCの委員就任と日本のオリンピック参加を要請した。

IOC委員に就任した嘉納は日本のオリンピック参加を前提に検討を進め、代表選手の選手母

体である NOC に相当する団体の組織化に着手する。まず文部省に協力を求めたが、「まだ国民の体育運動も遅々たる状態であって、当局の食指を動かすには至らず⁴⁾」という状態であり、協力依頼を断念せざるを得なかった。次いで、1891年に創設された日本体育会に打診したが「体育会の理想と相違する」として拒絶された。このため嘉納は既存の団体に頼ることをあきらめ、新規の団体樹立を図った。

嘉納が着目したのは学校体育関係者の協力依頼であった。自身も東京高師校長であり、東京帝大総長、早稲田大学長、慶応義塾塾長に呼び掛けて体育団体結成に協力を求め11年7月、大日本体育協会設立にこぎつけた。当面、嘉納を会長とし、総務理事に大森兵蔵（東京 YMCA 主事）、永井道明（東京高師教授）、安部磯雄（早大教授）の3人が就いた。

2.3 第5回オリンピック予選

大日本体育協会最初の事業として、初のオリンピック参加代表を選ぶ競技会は1911年11月18、19の両日、新設された東京・羽田の競技場で実施された。予選会当日、嘉納は自ら審判長に立ち、競技規則は大森が翻訳した米国の陸上ルールブック「審判および競技規定⁵⁾」を適用した。実施競技は100 m, 200 m, 400 m, 800 m, 1,500 m, 5,000 m, 10,000 m, マラソン(25マイル)、走り幅跳び、走り高跳び、棒高跳び、立ち幅跳び、立ち高跳びの13種目とした。日本で最初の本格的な陸上競技会であり、参加したのは大学生を中心とする全国から集まった91人であった。翌12年2月の選考会議で、3種目(100 m 12秒0, 400 m 59秒3/5, 800 m 2分19秒1/5)を制した三島弥彦(東大)と2時間32分45秒でマラソン優勝の金栗四三(東京高師)の2人がストックホルム大会の代表選手に決定した。団長は嘉納、監督は体協総務理事の大森に決まった。

予選会の成績について大日本体育協会史(上巻)は「本競技会の結果を見るにトラックとフィールドに於いては我がスポーツ界としては相当の成績を挙げたが、当時判明していた世界的記録に比較すれば遠く及ばないものであった」と率直に述べている。とはいえ、金栗が勝った25マイルマラソンだけは驚異的なタイムが続出した。当時の世界記録である2時間59分45秒を大きく上回り、後続も好記録でゴールした。これについては距離に関する疑問が提起されたのは当然であったが、不問に付した。

監督の大森は岡山市生まれの36歳だった。京都の同志社を経て東京高等商業(現一橋大学)へ進み、米スタンフォード大学へ留学したものの中途退学し、体育指導者を養成するマサチューセッツ州の国際 YMCA トレーニング・スクール(現スプリングフィールド・カレッジ)へ転じ、現地で妻帯している。1908年に帰国後は、東京 YMCA 体育主事や日本女子大学校講師を務める傍ら、バスケットボールやバレーボールなどのスポーツ普及に力を入れた⁶⁾。最新のスポーツ知識とアメリカ仕込みの体育指導理論を身に付けた大森は、体協会長であり、初のオリンピック選手団長嘉納の片腕であった。

大森監督夫妻と三島、金栗両選手は12年5月16日、盛大な見送りを受けて東京・新橋駅を出発した。敦賀港から汽船「鳳山丸」でウラジオストクへ向かい、シベリア鉄道でストックホルムを目指した。現地に着いたのは6月2日で、新橋を発ってから17日目であった。同29日から始まったストックホルム大会の参加国・地域は28、男女合わせての参加選手は2,407人とされる。開会式は7月6日に行われ、15の競技が7月27日まで続いた。

3. 「瑞典通信」

3.1 校友会雑誌「広陵」

日本が初めて代表を送り出した第5回ストッ

クホルム大会を視察した広陵中学校の体育教師藤重源は大会直後、勤務する中学校の校友会雑誌「広陵」第3号（1912年10月発行）にオリンピックの様子を「瑞典通信」として書き送っている。雑誌「広陵」のこの号は140ページあるが、藤重の「通信」は48ページから60ページまでを占め、文量は約11,000字に達している。大会後の8月初め、英ロンドンへ向かう直前に投函したようである。以下、藤重の筆になる瑞典通信の記述に沿って内容を明らかにしたい。引用文中の旧字体は基本的に新字体とし、適宜句

読点を挿入するとともに仮名遣いを改めた。

3.2 ストックホルムへ

藤重は1912年5月24日に広島を出発し、同29日夜、ロシアの義勇艦隊予備船「リャザン号」で敦賀港を出港し同31日、ウラジオストックに到着した。日本で普通列車の切符を購入していたものの、日数がかかるためウラジオストックで急行の切符を買い直し、事前の研究不足を嘆いている。

シベリアの鉄路の旅は「ホコリで有名なシベリアの広野を縫うて無味乾燥なる窮屈生活」が10日間続いた。ただ、「途中のバイカル湖畔、連山白雪斑点たる勝景の眺めは特別であった」とし、6月9日にロシアのサンクトペテルブルクに着いている。翌日、フィンランドに向けて出発し、12時間かけてオボに到着し、今度はバルト海を渡る船旅である。北欧の海は大小の島々が点在し、故郷広島瀬戸内海に似ているようだったが「水をもって有名なるフィンランドはいかにも世界第一である。沼池湖海大島小島の配列振り、色彩の優麗なるはとても日本三景等もはるかの手前製の感があつた」と賛辞を惜しまない。未知の外地に向かう身にとって、つかの間の絶景を楽しむ余裕があつたようだ。こうして、ストックホルムに無事到着したのは6月11日午前9時30分で、14日間の長い一人旅であつた。

スウェーデンに着いた藤重は、現地を「非常に小さな水の多き立派な街と一目に観察した」と評した。さらに「一般人士の姿勢の正しく優美なることである。この国は日本とはなはだ良く似ている。ただ、大いに違うところは国民が体育運動に熱心にかつ多大の趣味を持っていることである。この国の人は一般に風俗極めて平和で富が平均している。実に妙意を持って接し、すこぶる快絶を感じた」と、穏やかなスウェーデン人の気質を見抜いた。

ストックホルム滞在中の宿舎は、現地公使館

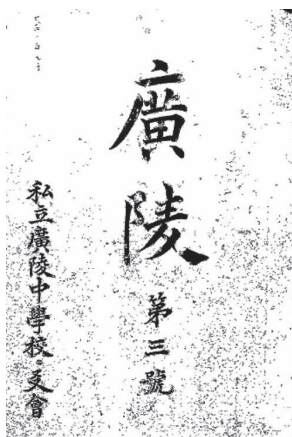


図1 校友会雑誌「広陵」第3号表紙
(広陵学園同窓会所蔵)



図2 藤重が投稿した「瑞典通信」

の計らいで大森監督夫妻、三島、金栗両選手の日本選手団と同じホテルとなった。同宿するのは選手団と公使館の山内四郎書記官のほか、報道陣の大井包高⁷⁾(読売新聞特派員)、土屋興⁸⁾(大阪毎日新聞特派員)それに藤重である。遅れて同28日、嘉納团长も加わり、小さなホテルはさながら「日本民族ホテル」と化した。嘉納の到着を待って在ストックホルム公使館で内田定槌公使主催の日本選手団晩さん会が開かれ、藤重らも参加し、記念撮影におさまった。藤重はこの時、「東京大阪朝日新聞特約通信員」と名乗り、「瑞典通信」にもそう記載している。どのような経緯で朝日新聞通信員となったかは不明であるが、朝日のオリンピック報道の詳細については後述する。

藤重の一文によると、当時のストックホルム在住日本人は公使館員(公使、書記官、書記生、通訳、コック)以外には書家(奥野某)がいるだけであった。さらに、陸軍戸山学校から派遣された林保吉中尉が王立中央体育専門学校に留学していた。オリンピック期間中は、欧州体育事情視察中の陸軍戸山学校教官・林二輔中佐、ロシア駐在武官補佐官の福田彦助陸軍少佐、ベルリン駐在の吉岡豊輔陸軍騎兵大尉、欧州留学中の京都帝大・田島錦治教授⁹⁾も合流している。読売・大井記者は留学中のロシアから、大阪毎日新聞・土屋記者も同様にロンドンから派遣されていた。

3.3 第五回オリンピックゲーム

藤重はストックホルム大会の模様を上記標題の下、多くの項目にわたって記す。競技の本筋というより、見聞きした範囲の身辺雑記に近く「ゲームの前後を通じてその状況の顛末を観察して、わが感じた点を合わせて報ずる」とする。「瑞典通信」の表記に沿いながら、内容を紹介する。

①スタジアム

「ワルハルラ・ウェーゲンと称するこの地の自然的公園にして並木林の大広場で、好適な運動場は、今までに見られざる壮観を極めている」と評した競技場は、「楕円形で約三千坪もあろうか、灰色と赤を混ぜたレンガ造りで、観客を三万人も入れるそうだとその壮大さに驚く。大会はこのメインスタジアムだけではなく、テニス、射撃、水泳、サイクリング、マラソンなどは別会場で行われた。

スタジアムには参加各国の国旗が翻っていた。「その中で日章旗が、ことさらに旭日輝くときと夕陽に映ずるときほど格別に愉快に感じられた」と、異国で見上げる日本国旗に感傷を寄せた。「ゲームに勝利を得たる国の国旗を第一の高き竿に吊り上げるようにできている」とは表彰式の様子であろう。

②選手の数

開催国スウェーデンは百余名で、総勢は二千二百六十一名が参加選手数であるという。そのうち日本人は二人であった。「いかにも残念至極。はなはだ心細い次第である。日本ではまだ、オリンピックゲームのいかなるものかさえ知らぬ。いな知っているも趣味を持たずして看過する者が多いのに引きかえ、欧米各国はいかに、実に雲泥の差があるのである」と、日本の参加選手の少なさと欧米選手への多数の応援観客との落差を嘆く。

③ゲームに関する各国の元気

オリンピックに対する参加各国の支援体制や応援に関し、次のように報じた。「仏国には議会に提出して選手の費用補助支出方を可決通過せるやに承る。元気旺盛なる後援ぶりである。独逸のごときは兵学校生徒をも乗せ遠洋航海を兼ねてきたり、まことに目覚ましい行いをしてい。英国及び米国等は、ストックホルムの人々が倍加せぬかと疑わしむほど選手と観客応援隊を送っている。個人として来る者も無数で

ある」とし、「かかる瀟洒たる者が日本人の中で幾人あるか、すこぶる肩身の狭い思いがする」と対比した。

④賞品

大会では勝者らへ賞品が提供されていたように「皇帝皇族、富豪より巨額の財を投じて、十二分の衣装を擬せる各運動に関する賞品を寄贈している」と紹介する。ここでも日本との比較で「しかるに日本よりは何一つだに無きは見物に至り説明書を見、または案内者から聞かたびに、またいっそう肩身の狭い思いである」と、孤立無援の様相を記す。

⑤選手の練習ぶり

日本の三島、金栗両選手のストックホルム入りは6月2日であった。「土地と気候に慣れないためであろう。ことに日本選手は食物の訓練も必要で」と早めの到着に理解を示す。選手団の第一陣はオーストラリア、第二陣が日本、次いで南米チリだった。「その後漸次到着したが、英、米、独、仏、露などは早くよりこの地に来る必要がないので、ゲームの開始せらるる前日頃到着した」と、ここでも欧米各国との差を指摘する。

⑥我が選手の練習ぶり

三島弥彦選手は、クラブのグラウンドやスタジアムで毎日午後3時より6時すぎまで行った。「元気あくまで旺盛、平然たる様子はさすが競技に場慣れたる運動家たる面影が見える」としながら懸念を隠さない。「関節に充血等を起こし、完全に練習できず毎日マッサージを受けている。歩行姿のいかにも難儀の様子を見ては落胆の外はない。実に気の毒の至りではないか、残念ではないか」と、けがに苦しむスプリンターの心中を察するのである。

金栗四三選手のマラソンコースは、山坂多い田舎道で「水一杯も飲み場がない極めて困難な道」であった。その寂しい道をただ一人で練習していた。4、5度は藤重も同行、伴走した。

「友は吾輩あるのみである」と、金栗の良きパートナーでもあったようだ。それでも、嘉納団長や田島京大教授ら邦人応援団は日章旗を翻した車でコースを視察したという。

⑦金栗君について

マラソンの国内予選会で2時間32分45秒という世界記録を上回る破格のタイムを残した金栗選手に関しては、「各国とも恐怖心を持って注目している」と評した。「氏のレコードに関しては各国とも第一、二等者たることを認めている」と、下馬評の高さに驚きを示す。

⑧報道機関

(ホテルの)事務室にはスウェーデン現地紙が20種類置いてあった。「ほとんどがスウェーデン語であり、英語の新聞は数紙にすぎない」。その中で「Stadion」紙が当日の競技会スケジュールや翌日の予定を知るのに好都合だった。独学で英語をマスターしていた藤重にとって、英字紙が格好の情報源であったようだ。

3.4 開会式及び競技

①開会式

競技期間中の7月6日午前11時から始まった。アルファベット順に入場行進が始まり、日本は10番目に登場した。三島が日章旗を持ち、左横に金栗が「NIPPON」のプラカードを掲げた。2人の後に嘉納団長、大森監督、田島教授、それに日本公使館のハーフベルヒが続いた。開会セレモニーはスウェーデン・オリンピック委員長グスタフ・アドルフ皇太子があいさつし、皇帝グスタフ五世が開会を宣言した。大僧正の祈禱、讃美歌などがあり厳粛な雰囲気が進んだ。

開会式の紹介に及んで藤重の筆は鈍った。選手2人、役員4人の総勢6人という貧弱なデレゲーションを前に「黄色人種を代表せる日本民族にして、かくも人数において遜色があり、行進すれば歩調は合わず、身長は格別に低く、いまだ容易に彼らの中間に入って人種的格闘をす

るには程遠き感に堪えなかった」と記す。「わずか（三島、金栗の）二人以外にはいないのかと思えば、情けなくなってプレス席で泣いた」とまで吐露した。

②競技

短距離の三島は100 m 予選で先頭から10 m 以上遅れて最下位に終わった。1位の米国選手10秒6、三島は11秒8だった。200 m 予選は1位の22秒8に対し、24秒台でまともに最下位に沈んだ。3回目の予選となる400 m は当初5人エントリーしたが、3人棄権した。無条件で準決勝へ進出できたものの、疲労蓄積の2位三島は競技続行を回避した。「どれも最後に着くからたまらない。脚が短いと運び方がまるで違う。お話にならぬ」と藤重の評は手厳しい。「以前から脚部を痛み、毎日マッサージを受けている」と三島への同情の余地はあるが、「日本民族の今後のオリンピックゲームに大々的覚悟を要することが知れる」と、欧米選手との力量の差を再認識している。

期待されたマラソンの金栗は途中棄権に終わった。その理由を「当日は前後にない炎天で、アフリカやアメリカ人が比較的良好最後までやり通したので、不成績を得た。わが金栗選手は行きの途中で暑さのため中途した」と記した。7月14日のレースは68人がスタートした。ゴールしたのは半数の34人で、ポルトガル選手は日射病で倒れ、翌日病院で死亡したほどの過酷なコンディションであった。

オリンピック期間中の競技自体に関して、藤重の記述は簡素である。初参加の大会に意気込んで現地入りしたものの、欧米選手の力感に比べ体格で劣る日本選手の貧弱さや不振ぶりに落胆したのかもしれない。「いずれも大敗大恥辱この上もなしである。4年後の1916年柏林である時までには十分の覚悟を要する」と指摘した。

③終結

オリンピックを視察した総論として以下のよ

うに結んでいる。「このたびのオリンピックゲームにおいて、（日本選手は）勝つべき実力を有する欧州人とは違ったところがある。わが日本選手は科学研究を要するの急なるを感ずると同時に、一般人士の運動（体育）思想を作らざるべからずと思う」と、いまだスポーツが未普及である日本の事情を憂い、科学的トレーニング導入の必要を説く筆致は鋭いものがあつた。

4. 瑞典国ストックホルム

4.1 渡航の経緯

広陵中学校の校友会雑誌「広陵」への投稿によって、オリンピック視察の様子は把握できる。では、藤重はどのようにして渡航したのか、現地ストックホルムでの活動はどのようなものだったのか、客観的な裏付けを求める必要があろう。渡航の事実は広島県立文書館（広島市中区）所蔵「外国旅券下附表」の写しから判明した。旅券番号187500号として、1912年5月9日付でパスポートが交付されていた。それによると藤重源は1889（明治22）年9月16日生まれで、広島県佐伯郡大竹町（現大竹市）在の藤重仙之介の長男である。旅行地は「瑞典（スウェーデン）ほか四国」であり、旅行目的は「体育研究」の初渡航であった。

藤重は渡航時、22歳9カ月だった。現在の大竹市元町の生家は手広く農業を営み、相当の田畑を有していたようである。源の甥にあたる藤重匡克によれば¹⁰⁾、長男源には男2人、女2人のきょうだいがいたという。1903年3月に大竹尋常高等小学校を終え¹¹⁾、しばらく家業に従事した後、09年7月日本体育会体操学校男子部高等本科の18期生として卒業¹²⁾している。

日本体育会が経営する体操学校は現在の日本体育大学で、当時は修行年限1年6カ月の高等本科と1年の普通科があつた。高等本科は18歳以上25歳以下の同校普通科卒業生か中学3年修了者が入学資格で、高等本科を終えれば中等学

校体操科教員の無試験検定出願資格を得ることができた。私立各種学校でありながら、中等学校体操科教員資格に関して体操学校は官立の東京高等師範学校体操専修科と同等の扱いであった¹³⁾。

体操学校を卒業した藤重は帰郷し、ただちに母校の大竹尋常小学校教員に採用されている。しかし、5か月勤務ただけで1910年5月、広島市竹屋村の私立広陵中学校（現広陵高等学校）へ体操科教員として迎えられた。広陵中は福岡県出身の教育家、鶴虎太郎が私塾を発展させ1907年4月、中学校令による認可を得て設立¹⁴⁾した。藤重の赴任時は5年生までそろい、生徒数187人、教職員10人だった。青年教師の藤重は体操（体育）のほか、習字を担当し柔道部部长（顧問）を引き受けている。

中学教師となったものの、在職期間は短かった。ストックホルム・オリンピックへの日本参加が伝わると、早々に渡航を望んだようだ。その根拠を示すものはないが、考えられるのはまず、選手団長の嘉納治五郎の存在である。藤重は幼少のころから柔道に親しんでおり、生家近くには柔道司箭流中川保太郎の道場があり、柔術の朝池植五郎の元にも通っていた。体操学校では柔・剣道は正課であり、広陵中でも部長を務めるなど柔道との縁は深い¹⁵⁾。当然、柔道生みの親、嘉納の名前は熟知していよう。ちなみに1928年建立の中川保太郎顕彰碑の碑文は嘉納の筆によるものであった。選手団の大森監督の名前も体操学校在学中から届いていたはずである。日本体育会発行の雑誌「體育」150号（1906年5月）には大森の「希臘（ギリシャ）競技の復興」とするオリンピックの論文が載り、藤重が卒業後の1911年10月から同校講師として「オリンピック史」「競技法」を講じている¹⁶⁾。嘉納、大森の2人が名を連ねる日本選手団に関心を持ったのは必然であろう。さらに、体操学校で学んだ普通体操、スウェーデン体操の教授法



図3 「広陵」第2号掲載の藤重柔道部長（中段㊟）

などについての関心も本場での視察を熱望する動機になったのではあるまいか。

ストックホルム行きが実現すると5月23日、広陵中では送別会が催され翌24日、全生徒は広島駅で恩師の旅立ちを見送った。広島の日元紙、芸備日日新聞と中国新聞両紙は5月26日付で「藤重教諭の渡欧」を記事にした。中国は「オリンピック大会に臨み、終了後は独仏、英米を視察して研究を積み帰朝する」と報じた。

一方で、藤重は渡欧と同時に広陵中学校の辞職を伝えていたと推測される。藤重不在となった6月、早くも後任の体育教師、寺一研造が同校に赴任¹⁷⁾しているからである。藤重は不退転の決意で渡航したのであろう。

4.2 スtockホルムの藤重

単身、ストックホルム入りした藤重は「朝日新聞特約通信員」として、活動を開始した。しかし、大会後スウェーデン・オリピック委員会が発行した公式報告書の外国人ジャーナリスト名簿にその名は見当たらない。邦人記者の欄には大井包高（読売）、土屋興（大阪毎日）そし

て大森兵蔵の3人が記載されている¹⁸⁾。大森監督は報道要員としても登録していたようで、藤重の「瑞典通信」にも「大森氏は日本委員を兼ねて新聞通信を司っている」とあり、選手団役員の傍ら、日本へ競技情報を打電していたのかもしれない。

通信員とはいえ、藤重の活動は公使館や選手団にも認知されていたとみえ、選手らと同じ宿舎であり公使主催の祝宴にも招かれている。他紙にも藤重の動向は掲載された。東京紙「萬朝報」の現地通信員ハグベルグは「日本の新聞記者の来襲」とする記事の中で、毎日・土屋、読売・大井に次いで「広島中学校の一教師、藤重氏は今後1カ月間この地に滞在しオリンピック競技の通信をするということである」（7月3日付）と報じた。同紙7月25日付「万国競技詳報」欄では、同じハグベルグ記者の開会式記事の描写中「観覧席では公使館員、林中佐、大井氏、土屋氏、藤重氏の顔が見受けられた」と紹介した。スタンドから読売、毎日両記者らと一緒に開会式を見守っていたようである。また、「オリムピックと記者」とする記事（7月24日付）で、「6日スウェーデン皇帝は園遊会を催し、各国の新聞記者12名を招待したが、日本は3名の記者が招待された」と触れ、毎日、読売、朝日の邦人記者・通信員であることを示唆している。ハグベルグは、スウェーデンの「アフトランデット新聞」記者で日本語を解し、萬朝報の通信員を兼ねていた。藤重は「この地の人ながら、日本及び日本人を紹介して好意を持って書くのは君独りだ」と同記者の親日ぶりを紹介した。

読売新聞の特派員、大井包高（筆名犀花）は大会後、「オリンピック競技見物」（7月13日付－8月13日付）とする記事を15回連載した。紙面や当時の通信事情の関係からほとんど大会終了後の掲載となった。そのうちの11回目（8月7日付）で、「日本の（オリンピック）応援

隊は内田公使、同夫人、林中佐、藤重東京朝日、土屋大阪毎日らと余の12人なり」と、少数の邦人応援団の顔ぶれに藤重を加えた。

滞在中のロンドンからストックホルム入りした大阪毎日新聞の特派員、土屋記者は大会期間中精力的に記事を書き送っていた。事細かに日本選手の動静を伝え、終了後の7月28日付から8月22日付まで20回の連載「オリンピック競技」を掲載した。しかし、藤重や大井ら他紙記者の動向には一切触れていない。

藤重は「瑞典通信」文中でマラソン代表の金栗に関して「友は吾輩あるのみである」と記した。異郷で孤独なトレーニングを続ける金栗に寄り添い、同世代の体育教師らしく時には伴走も買って出たようだ。金栗は1983年、92歳で死去したが、地元熊本県の熊本日日新聞は1960年3月から、金栗への聞き書きを基に構成した評伝「走れ二十五万キロ マラソンの父金栗四三伝」を夕刊で連載、61年5月に同名の単行本¹⁹⁾として刊行した。2013年8月には加筆された復刻版²⁰⁾を出版した。同書では2カ所、ストックホルムでの金栗らと藤重のやりとりが出てくる。

まず「孤独の練習」と題した項で、「大森監督は病気のためか、練習場にはほとんど顔を出さなかった。欧米体育の視察のため四三たちよりちょっと遅れてストックホルムにやってきた広島広陵中学教諭の藤重源が、いろいろと面倒をみてくれた²¹⁾」とあり、金栗に付き添った藤重の記述と一致する。さらに、大会終了後に公使館招待の慰労会に出席した後、嘉納団長は「三島、金栗両選手と欧州留学中だった広島広陵中学の青年教師藤重源の三人を繁華街の喫茶店に誘った²²⁾」という。この時、嘉納団長は「みんな落胆してはいけない。結果は予想していた通りだ。しかし、外国の技術を学び、大きな刺激を得たことは大成功と思う」と話し、藤重には「今後、米国へ留学の予定と聞くが、こんどのオリンピックのナンバー・ワンはアメリカ

表1 ストックホルム・オリンピック期間中の東京朝日新聞記事一覧

| 日付 | 見出し | 行 | 発信日・発信地 | クレジット |
|------|---------------------|----|--------------|---------|
| 6/29 | オリンピック競技 今29日より開始す | 9 | | |
| 6/30 | 国際競技の開始 嘉納治五郎氏着す | 11 | 29日ストックホルム | 本社特電 |
| 7/5 | 白夜の瑞典 国際競技彙報 | 64 | 5日 | |
| 7/7 | 今回は伯林 | 3 | | 伯林特約通信社 |
| 7/9 | オリンピック開会式 | 5 | ストックホルム | 特派員発 |
| | 三島選手利あらず | 2 | | |
| | 庭球競技の優勝 | 7 | 6日 | 伯林特約通信社 |
| 7/10 | 各国選手の競技振 米国人大いに勝つ | 11 | 9日ストックホルム来電 | 特派員発 |
| 7/11 | 金栗選手有望 | 3 | ストックホルム特電 | |
| | 第1勝は英国人 | 3 | 10日 | タイムス社発 |
| | 角力競技の不平 英国選手は加わらず | 3 | 10日 | タイムス社発 |
| 7/12 | 二百米予選 我が三島選手は最後 | 4 | ストックホルム特電 | |
| 7/13 | 英米選手勝利 1万米徒歩競争 | 4 | ストックホルム来電 | |
| 7/14 | 我選手の競走振 人気頗る大 大喝采 | 18 | ストックホルム来電 | タイムス社発 |
| | 三島選手落第 400競走予選 | 4 | ストックホルム特電 | |
| | 勝利を得たる各選手 13日の3競走 | 5 | ストックホルム来電 | タイムス社発 |
| 7/15 | マラソン競走の開始 金栗選手の有利状態 | 12 | 13日ストックホルム特電 | |
| 7/16 | マラソン大競走 25哩の大競走第1報 | 4 | ストックホルム特電 | |
| | 金栗選手の元気 参加84に減 第2報 | 6 | ストックホルム特電 | |
| | 長蛇を逸す アフリカ選手勝利第3報 | 8 | ストックホルム特電 | |
| | 葡国選手暑気に倒れる 第4報 | 4 | ストックホルム特電 | |
| | 阿選手の成功 観客に感動を 第5報 | 27 | ストックホルム特電 | |
| | 金栗落伍 | 3 | ストックホルム特電 | |
| | 金栗中止事情 | 3 | ストックホルム特電 | |
| | 夜の招待会 日本人20名出席 | 3 | ストックホルム特電 | |
| | 日本人出発期 | 2 | ストックホルム特電 | |
| | 英人は第14位 | 2 | | タイムス社発 |
| | 英人の勝利 | 3 | | タイムス社発 |
| 7/17 | マラソン大競走 失敗は靴の為 | 7 | | |
| | 葡国選手死亡す | 7 | | |
| | 日本に対する希望 | 5 | | |
| | 列国の得点と米国 | 5 | | |
| | 晩餐会別報 | 4 | | |
| | 米国の勝利 1600米(リレー)競走 | 3 | | |
| | 英豪も勝つ 男女遊泳競走 | 4 | | タイムス社発 |
| | 各国成績別報 | 4 | | タイムス社発 |
| | 選手に月桂冠 | 7 | 16日上海経由 | 路透社発 |
| 7/18 | 宮中の大宴 オリンピック終了 | 5 | ストックホルム特電 | |
| 7/21 | 国際体操競争 | 6 | 20日ストックホルム来電 | タイムス社発 |

かだ。その地のスポーツを大いに吸収してきてほしい²³⁾」と励ましたという。この点に関して「瑞典通信」では直接言及こそしていないが、「嘉納氏は日本民族の体育思想に乏しきと、体格の劣等なるとを示し、(中略)このたびの(日本選手の)大敗は負け惜しみのようなではあるが、非常に不都合なりと常に申しておられた」と記している。

4.3 朝日新聞特約通信員

オリンピック期間中の藤重は東京・大阪の「朝日新聞特約通信員」と称した。「瑞典通信」にそう記述し、読売新聞でも報じられた。ところが、当の朝日新聞には大会期間中、一度も藤重の名前は掲載されていない。特派員を派遣した大阪毎日、読売の両新聞に比べ、朝日は一貫して地味な報道である。前年の代表選考会や三島、金栗選手らの新橋駅出発など事前報道は比較的手厚く報じているのに対し、一転して競技会の報道はシンプルに見える。

表1は、ストックホルム大会期間中の朝日新聞関連記事の一覧である。行数は短いが当時の記事は1段に18文字を充てているため、現在に比べて詰め込んだ印象を受ける。それでも、毎日や読売、萬朝報に比べて情報量が多いとはいえない。金栗のマラソン当日は、次々と入電する情報を並べているに過ぎない。23行を費やして1本の記事にまとめた毎日とは対照的な編集である。

表中の39件のうち、発信地やクレジット(発信元)が分かるのは30件であるが、記者(特派員、通信員)の名前は一切出していない。「ストックホルム特電」は特別電報の意味であるが、発信元は明らかではない。あるいは日本選手の情報に関しては、藤重が打電したのかもしれないが、記事からではうかがいが知ることにはできない。「タイムス社発」というのは、朝日新聞が当時契約していた英ロンドン・タイムス社からの記

事である。

朝日新聞社史によれば、オリンピック時の1912年7月時点で特派員は米ニューヨークに1人駐在した。中国、朝鮮方面を除く欧州や東南アジア、豪州などに約30人の通信拠点を置いたがほとんど現地に滞在する名誉通信員や留学生であったという²⁴⁾。明治末期の外国通信事情は、英ロイター通信社がアジア地域の独占権を握り、日本では時事新報社と契約し、朝日も独自の契約でロイター電を入手していた²⁵⁾。しかし、朝日のオリンピック記事で「ロイター(路透社)発」が判明したのは上海経由の1件(7月17日付)である。いずれにしても、タイムス社を除く「ストックホルム特電」の発信は藤重だったのか、確証は得られず、朝日新聞社史編修センターの調査²⁶⁾でも藤重と断定する史料は見つかっていない。もっとも、本社特派員を除く現地通信員による報道は原則無署名によるものであり、発信者を特定するのは困難と言えよう。

朝日のオリンピック記事は7月21日付が最後となった。翌22日、明治天皇の病状悪化が報じられ、同30日午前死去した。ただちに元号は「大正」と決まり、朝日の新聞紙面は「崩御」一色となってオリンピック関連記事は消えた。8月半ばまで連載記事を掲載し続けた毎日や読売とは趣を異にしている。

5. 新天地アメリカ合衆国

5.1 カレドニア号

オリンピックの競技を見終えた藤重はまず、イギリスへ向かった。欧米の体育事情視察が当初の渡航目的であり、「瑞典通信」では「(ストックホルム大会を通じて)勝つべき欧州人は違ったところがある。いかに彼らの青年男女が運動するかを視察する」とし、マンチェスター、リバプール、エジンバラを訪れ「視察と研究に寸暇がない」約10日間のイギリス滞在だった。

「瑞典通信」は、スコットランドのグラスゴー

へ赴く時点で脱稿している。その後の足取りは不明であり、前述した甥の巨克は「結局、日本には戻ってこなかったらしい」と述べた。その根拠として、「外国旅行中に手元のお金が足りなくなったようで、大竹の実家に送金を依頼したらしい。父親は田畑を売って工面した2,000円を送金しようとしたが地元の郵便局では受け付けてもらえず、広島市まで出向いてやっと送金したと伝え聞いている。長男でありながら家が1軒建つほどの大金を親に用立ててもらい、とても顔向けできないと帰国しなかったのではないか」と推し量る。1912年当時の2,000円は、現代の感覚では約620万円に相当²⁷⁾する。藤重が帰国をためらったのも当然なのかもしれない。以後、実家では長男源の話題はタブー視され、音信は途絶えたという。

先述のように、藤重はストックホルム滞在中、嘉納団長に対して渡米して体育事情の視察を続行する旨伝えていた。嘉納からも「アメリカのスポーツを吸収すべきだ」と激励されている。グラスゴーから向かった先はアメリカであった。12年8月10日、アンカー・ライン社の大西洋航路客船カレドニア号(5,066総トン²⁸⁾)でニューヨークに向けて出港した。以後のアメリカでの足跡は、米家系調査ウェブサイト「アンセストリー・ドットコム²⁹⁾」を活用し、公的資料を中心に追跡調査したものである。

5.2 ハジメ・フジシゲ

グラスゴーを発ったカレドニア号は8月19日、米ニューヨーク港へ到着、直ちに入国した。ニューヨーク入管当局への乗船リストには、職業欄に「教師」とあった。その後、藤重は西海岸のカリフォルニア州へと向かっている。

同州サクラメント市の日系人向け邦字紙「桜府日報³⁰⁾」1912年11月12付紙面には、「講演会の況盛」の見出しで、同10日、市内のホールで行われた広陵青年会修養部主催の講演会に登壇

した藤重がオリンピックの歴史やストックホルム大会の日本選手の成績などを紹介、「オリンピックは世界的平時の戦争である」と力説し、250人の聴衆から拍手を浴びたとする記事が載った。

北カリフォルニア、サンフランシスコ北方のサクラメント市には1890年ごろから日本人が移住し、1907年に桜府平原日本人会が生まれた。年ごとに移住者が増え、13年時点の邦人はサクラメント市2,751人、周辺部のサクラメント郡は3,710人で、ロサンゼルス、サンフランシスコ両市に次いだ³¹⁾。中でも多数を占めた広島県出身者は12年9月に広島県人会を設立し、11月の講演会を主催した広陵青年会は同県人会の青年組織に相当したようだ。

桜府日報のその後の紙面によれば、講演会に訪れた当地で藤重は日本人小学校の教師に就いていた。13年3月の桜府(サクラメント)日本小学校の修業証書授与式で司会を担当³²⁾している。さらに2年後の15年3月4日付では「藤重氏の結婚披露」の記事が掲載された。

「桜府日本小学校教師藤重源氏は、石坂サダメさんと昨日午後、当地仏教会で結婚式を挙げ、同八時より日本町菊水亭に知友五十余人を招きて披露の宴を張りたる」とある。記事によると、新婦サダメは熊本県出身の石坂圓太郎の3女であった。「アンセストリー」によれば、サダメは1898年5月14日、ハワイ・ホノルル生まれで、サンフランシスコやサクラメント郊外ウォールナツグロブで育ち、結婚時は16歳だった。「欧米の体育事情視察」の目的で12年5月に広島を出発した藤重は欧州経由でアメリカに渡り、やがて住み着いたのである。挙式の4カ月後、15年7月6日に長女マサコ(アリス・マサコ)が誕生、家族を得た藤重源は「ハジメ・フジシゲ」としてアメリカ社会での定着を決意したようである。

5.3 フジシゲ・ファミリー

ハジメの家族は次第に増えていった。長女マサコに続いて1918年8月12日、長男イサオ（フレッド・イサオ）が生まれた。この時はカリフォルニア州フレズノ市へ移っている。再びサクラメント市へ戻った21年8月5日、2女タエコ（クララ・タエコ）が、27年3月31日には3女となるアキコ（ヘレン・アキコ）が誕生している。フジシゲ家は6人家族となった。

・長女アリス・マサコ（1915-1993）

サクラメントで生まれ、1937年カリフォルニア大学パークレー校を卒業した。41年に父親が佐賀県出身のカオル・ケイ・ヒライとオークランドで結婚し、65年に死別した。43年に長女アーリン・カエが生まれた。

・長男フレッド・イサオ（1918-2012）

カリフォルニア州フレズノで生まれ、36年同州セルマ・ハイスクールを終え、父と同居した後、戦後の48年、父親が岡山県出身のフミコ・ベルタ・オオスミと結婚。2014年ロサンゼルス・サンペドロで死去した。93歳だった。妻フミコは2016年に死亡した。

・2女クララ・タエコ（1921-?）

サクラメントで生まれ、44年にトム・ヒトシ・ナガマツと結婚し、翌年長女シェリー・トミコを出産した。夫は2001年に死亡し、長女はキクチ姓。

・3女ヘレン・アキコ（1927-2012）

サクラメント生まれで、56年にカリフォルニア大学ロサンゼルス校社会学部を卒後同年ジョン・ショウイチ・シムラと結婚。2012年、ロサンゼルス郡レドンドビーチで死去した。

5.4 ヒラリバー強制収容所

米在住の日系人は1941年12月7日、日本軍の真珠湾襲撃による日米開戦とともに、パニック状態に陥った。いたるところでFBIに監視され、邦字紙は発行を停止させられた。42年2月19日、

ルーズベルト大統領は反日世論に呼応する形で大統領令9066号に署名し、日本人の大部分が住むカリフォルニア州、オレゴン州、ワシントン州の大半の日本人一、二世ら11万2,353人の強制的な立ち退きを命じた³³⁾。土地と財産を奪われた日系人は15カ所の仮収容所へ集合させられた。強制収容所が建設されるまでの仮住まいであった。やがて5月以降、順次10カ所の収容所（戦時収容所）へ送り込まれた。

フジシゲ一家が移っていったのは、アリゾナ州フェニックス市から45マイル南東の砂漠の、旧インディアン居留地に建てられたヒラリバー（Gila River）収容所であった。急ごしらえのバラックで、半ば拘禁状態を余儀なくされた。ヒラリバーは最高時、13,348人（42年12月）の日系人がいたとされ、同じアリゾナ州のボストン収容所（同17,814人）に次ぐ規模³⁴⁾だった。ヒラリバーは土質が良く、収容所での農業生産は突出し、他の9収容所への食糧供給においても大きな役割を果たし、目立った組織的抵抗のない比較的トラブルの少ない収容所だったという³⁵⁾。とはいえ、バラック建ての部屋は劣悪な居住環境であることに変わりはない。

同収容所の開設は42年7月20日だった。サンフランシスコに近いカリフォルニア州プレザントンにいたフジシゲの家族は、仮収容所を経由して開設間もない8月4日、ヒラリバーへ収容された³⁶⁾。一家に充てられたのは27ブロック「9-A」という一室でハジメ（52歳）、サダメ（44歳）夫婦と長男イサオ（23歳）、2女タエコ（20歳）、3女アキコ（15歳）の家族5人が入居した。既に結婚してオークランドに住んでいた長女マサコ（27歳）と夫のケイ・ヒライも同じブロックとなった。他の収容所と同様、ヒラリバーにも学校や病院、教会、売店などがあり、新聞も発行され、日系人たちの手で野球の出来るグラウンドも整備された。

収容所生活の間、藤重家では慶事も訪れてい

る。長女マサコは43年11月12日に女兒（アーリン・カエ）を出産し、44年6月4日には2女タエコがトム・ヒトシ・ナガマツと結婚した。収容所で発行されている新聞「ヒラリバー・クーリエ（比良時報）³⁷⁾」の6月10日付日本語紙面には2人がメサキリスト教会で挙式し「時局にかんがみて披露宴を廃し、新聞紙上によって告知した」とする記事が載った。そのタエコには終戦が近い45年3月29日に女兒（シェリー・トミコ）が生まれた。米政府は45年1月、日系人隔離政策を転換し、立ち退き命令を撤回したが、これより先に、長女マサコ一家を含むフジシゲ家は44年6月18日までに収容所を出所した。結婚、出産した2女タエコはその後もとどまり、終戦後の45年9月10日にヒラリバーを離れた。

5.5 戦後のフジシゲ

ヒラリバー強制収容所を出所した一家の足取りは定かではない。多くの日系人がそうであったように、強制収容所へ送り込まれた際には自身の土地や建物を手放しており、めぼしい財産を持たないまま出所したことであろう。米本土におけるマイノリティ民族の悲哀は日系人に共通していたという。サクラメント～フレズノ～プレザントンと戦前、カリフォルニア州内を移り住んだハジメたちは、収容所を出ていったんはワシントン D.C へ向かった形跡が残る³⁸⁾が、ほどなくカリフォルニア州に戻ったと思われる。

アメリカに在住する日系一世は1922年以来、帰化不能外国人とされ、市民権を得る資格はなかった。外国人土地収用法をはじめとする差別も立ちはだかっていた。風穴があいたのは、日系市民協会などの啓発活動が実った52年の「マッカラン＝ウォルター（移民帰化）法」成立であった。これによって一世の帰化がようやく認められ、同法発効の52年12月24日から56年末までの4年間に、日系一世約25,000人が帰化権を獲得した³⁹⁾とされる。ハジメも53年12月

23日付で帰化を申請し、54年1月12日付で認可された。「アンセストリー・ドットコム」添付の申請書によれば、住所は「1254 W 36th St, Los Angeles Cal.」となっており、ロサンゼルスに居を構えていた。職業は「shipper janitor」とあり、64歳のハジメは荷送り管理人として港湾関係の仕事に従事していたようである。

アメリカ国籍を得て、ロサンゼルス市民となったハジメと妻サダメは、どんな余生を送ったのであろうか。家系図サイトでは以後の公的資料は発見できず死亡日時と埋葬場所しか記載されていない。それによると妻のサダメは63年1月1日に64歳で死亡し、ハジメは81年3月22日、91歳で亡くなっていた。ロサンゼルス市街地から北東11キロのモンレーパークが最後の住まいとなった。妻サダメや長男イサオらとともに、ロサンゼルス南東のウィットティアにある米最大の墓地、ローズヒルズ記念公園に埋葬されている。

6. お わ り に

1912年のオリンピック・ストックホルム大会に臨んだ日本選手団総勢4人、取材の新聞記者、視察した学者、軍人、現地に赴任した外交官ら居合わせた邦人は20人にも及ぶまい。何人かは後日、取材に応じて運動雑誌に登場、あるいは嘉納団長のように各地の講演で大会に触れているにすぎない。伊東（1965）の「オリンピック大会図書解題」や木下（1981）らの「体育・スポーツ書解題」のいずれもが、ストックホルム大会参加当事者による文献としては、陸軍騎兵実施学校教官として欧州に派遣されていた騎兵大尉吉岡豊輔が軍の部内雑誌に発表した「万国体育競技会概況⁴⁰⁾」が唯一としている。吉岡は騎兵将校の立場から、初めて採用された馬術競技の運営・競技方法を詳述しているだけだった。陸軍戸山学校の歩兵中佐林二輔も軍の立場から国内体操教育を再検討するため半年間、ドイツ

やスウェーデン、イギリスなどを視察し帰国後軍関係の雑誌2誌⁴¹⁾に寄稿しているが、いずれも欧州の体育・体操事情を概観し「積極的な体育奨励が必要」とするもので、ストックホルム大会への言及はない。

大会後、欧米諸国を視察して13年春帰国した嘉納団長は3月21日、年明けの1月15日に療養先の米国で病死した大森監督の追悼会と兼ねて東京高師で行われたオリンピック報告会に臨み「日本選手は一度敗れたりといえども、決して失望すべしにあらざ。体育運動に対する国民的自覚を喚起して次回の大会に於いて月桂冠を得ることは決して難しきことにあらざる⁴²⁾」と述べた。嘉納は以後、各地の講演や取材に応じた際、同様の趣旨⁴³⁾を力説した。選手である金栗は帰国後もマラソン練習に余念がなく、汚名を晴らすべく次のベルリン大会を見据えていた。短距離の三島は欧米を経由して13年2月帰国し、相次いで新聞や雑誌の取材に応じている。大阪毎日、大阪朝日両新聞は2月7日付で「欧米運動視察談」を掲載し、雑誌「運動世界」のインタビューでは「走力で圧倒的に劣ったのは事実だが、それ以前に孤独な練習で精神的に敗北した⁴⁴⁾」と述べ、少年雑誌「中学世界」では、「日本も今後は、古来武芸を尊んだように各種の運動を盛んにし、体育に、精神教育に国民の元気を養成しなければならない⁴⁵⁾」と説いた。

上記のオリンピック関連記事はいずれも、講演要旨や聞き書きであろう。オリンピック派遣母体である大日本体育協会は急ごしらえで発足したばかりであり、参加費用は自弁であった。後に刊行した「大日本体育協会史」(1936)や「日本体育協会五十年史」(1963)などのストックホルム大会報告は主に金栗の回顧談などで構成している。その点で、藤重が広陵中学校の雑誌に寄せた「瑞典通信」は、大会を目の当たりにした当事者の自著という点で貴重であり、スポーツ後進国の日本の現状を指摘し、科学的ト

レーニング導入が必要とする現実的な主張は的を射ているというべきであろう。これはストックホルム特電として、マラソンの金栗が途中棄権した直後の7月17日付東京朝日新聞に載った「日本が4年後に伯林(ベルリン)に開かるべき第6回オリンピック競技大会に対し科学的の修練を経たる尊ぶべき代表者を送り、このたびより人員を増加せんことを希望し居れり」とする記事の内容と相似している。無署名ながら、特約通信員の藤重源が打電した気がしてならないのである。

藤重がアメリカへ渡って20年後の1932年8月、第10回のオリンピック、ロサンゼルス大会が開かれた。日本選手団は役員61人、選手131人を送り込み、陸上、水泳、馬術で7つの金メダルに輝くなど計18個のメダルを獲得した。ロサンゼルスから北へ約600キロの地、サクラメントに住む藤重はどんな思いで同胞の活躍に接したであろうか。選手わずかに2人のストックホルムと比べて「隔世の感」と感慨を深めたのか、あるいは自身の境遇を顧みただろうか。

藤重源の存在を知ったのは1984年4月であった。当時、広陵学園90年史作成のための資料を収集していた岡本貞雄教諭(現広島経済大学教授)が校友会雑誌「広陵」から探し出し、中国新聞運動部記者だった筆者へ情報提供してくれた。ロサンゼルス大会開幕直前でもあり、「明治に広島からオリンピック視察」と記事化した。だが、「瑞典通信」をすべて読み込んでおらず、人物像に迫る余裕はなかった。

今回、再度調査に着手したところ、当該雑誌は広陵学園同窓会に保存されていることが分かった。広陵高校の若杉秀典事務次長、広島国際学院大学元教授の栗原理氏の協力を得て1912年の「広陵」2、3号などが閲覧できた。広島県立文書館に保存されていた旅券下付帳から本籍が大竹市と判明し、同市在住で甥の藤重匡克氏にたどり着くことも出来た。

ストックホルム大会に関しては、大森兵蔵監督の評伝を著した水谷豊氏、朝日新聞通信員については前田浩次・同社社史編修センター長、大阪毎日新聞の土屋特派員の動向は玉置通夫・元毎日新聞大阪運動部長の手を煩わせた。多くの方のご協力に感謝するものである。2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催を控えて、NHKは19年放映のテレビ大河ドラマで日本初参加のストックホルム大会を題材にするという。本稿で触れた三島、金栗の競技や嘉納团长、大森監督らの苦悩がどんな形で再現されるのか、興味深い。

注

- 1) 浜田幸絵 (2010)「戦前日本のオリンピック」『コミュニケーション科学』(32), p. 135
- 2) 長谷川孝道 (2013)『走れ二十五万キロ マラソンの父 金栗四三』(熊本日日新聞社・熊本陸上競技協会)。p. 105, p. 127
- 3) 内海和雄 (2012)『オリンピックと平和—課題と方法—』(不昧堂), p. 101。オリンピック復興の先行例としては1850年に生まれたイングランドの「マッチウエンロック・オリンピック」などがあり、創始者のウィリアム・ベニーブルックスは国際オリンピック構想を提案しており、クーベルタンは触発されている。佐山和夫 (2017)『オリンピックの真実』(潮出版社)に詳しい。
- 4) 大日本体育協会編 (1936)『大日本体育協会史上巻』(1983年復刻版, 第一書房), p. 16
- 5) 大森兵蔵が翻訳した米国陸上競技規則は12条から成り、後の1912年6月「オリンピック式陸上運動競技法」として運動世界社から出版された。
- 6) 水谷 豊 (1986)『白夜のオリンピック 幻の大森兵蔵をもとめて』(平凡社), pp. 118-172
- 7) 大井包高 (1883-1958)。本名は「かねたか」、筆名を「犀花」と称した。東京外国語学校(現東京外大)卒業後、ロシア留学中に読売新聞のモスクワ通信員となった。1912年に留学から帰り読売に入社したが2年で退社し、ロシア関係の貿易業務に就いた。
- 8) 土屋 興 (1883-1927)。慶応義塾を卒業し1910年大阪毎日新聞へ入社。政治部からロンドン勤務となった。14年にロンドン大政治経済科を卒業して帰国後は実業界へ転身した。富士瓦斯貿易の役員などを経て20年から2期、衆院議員を務め、在職中に死去した。
- 9) 田島錦治 (1867-1934)。東京帝大では競漕の選手として活躍し、京都帝大では経済学や社会政策学を講じた。ストックホルム大会時は欧州留学中で、開会式の入場行進に加わった。後に京都帝大の初代経済学部長や立命館大学長、日本漕艇協会第3代会長。
- 10) 藤重仙之介の3男植一 (1903-73)の長男で、源の甥にあたる。1937年生まれで、元甘日市市立浅原小学校長。2016年3月10日、大竹市本町1丁目の自宅で聞き取り
- 11) 大竹市立大竹小学校卒業証書台帳第70号
- 12) 日本体育会 (1909)「卒業生名簿」『體育』189号, p. 56
- 13) 学校法人日本体育会 (1973)『日本体育会日本体育大学八十年史』, pp. 324-334。藤重が在学中の1909年4月からは2年制の高等科となった。
- 14) 学校法人広陵学園 (1994)『広陵百年史』, pp. 28-33
- 15) 広陵中学校 (1912)「柔道部記事」校友会雑誌『広陵 第2号』, pp. 104-105
- 16) 前掲書『日本体育会日本体育大学八十年史』p. 1149
- 17) 広陵中学校 (1913)「本校職員一覧」『広陵 第4号』, p. 74
- 18) THE SWEDISH OLYMPIC COMMITTEE (1912)『THE OFFICIAL REPORT OF THE OLYMPIC GAMES』, p. 995
- 19) 豊福一喜・長谷川孝道 (1961)『走れ二十五万キロ マラソンの父金栗四三伝』(講談社)
- 20) 長谷川孝道の著作として、一部加筆し、同名のタイトルで熊本日日新聞社・熊本陸上競技協会が2013年に復刻版を発行した。
- 21) 前掲書, pp. 104-105
- 22) 前掲書, p. 127
- 23) 前掲書, p. 128。同書での嘉納、金栗らの談話が水谷の『白夜のオリンピック』、佐山和夫 (2011)『箱根駅伝に賭けた夢』(講談社)に引用されている。
- 24) 朝日新聞百年史編修委員会 (1990)『朝日新聞社史 明治編』, pp. 562-563
- 25) 有山輝雄 (2013)『情報覇権と帝国日本Ⅰ』, pp. 302-304
- 26) 筆者の問い合わせに対し2018年3月27日付、朝日新聞社史編修センター(東京)から「当時の東京本社の史料は焼失・廃棄し、大阪本社史料の通信員リストに該当者は確認できず」と応答。
- 27) 消費者物価指数による貨幣価値換算サイト「消費者物価計算機」(<https://yaruzou.net/data-jpn-cpi-inflation-rate>)による。
- 28) 北 政巳 (1993)「スコットランド海運企業史(3)」『季刊創価経済論集』23号(創価大学), p. 76
- 29) 「アンセストリー・ドットコム」(<https://search.ancestry.com.au/>)は1983年設立の民間家系情報提供会社。有料会員サイトには200万人以上が登録し、名前、生年などから判明した公的ファイルを引き出せる。
- 30) 「桜府日報」はカリフォルニア州の州都サクラメント市で水谷万嶺が1907年に創刊した邦字日刊紙。1923年以降は広島県出身の武田久太郎、沖

- 健二らが経営し1939年から休刊する1941年まで元萬朝報記者の岡 繁樹が運営した。広島県文書館は1909年5月から39年7月まで(24年1月～39年5月は欠号)複写版を収蔵している。
- 31) 日米新聞社(1914)『日米年鑑』, p. 109
- 32) 桜府日報1913年3月28日付, p. 3
- 33) 白井 昇(1981)『カリフォルニア日系人強制収容所』(河出書房新社), pp. 46-60
- 34) 加藤新一編(1961)『米国日系人百年史』(新日米新聞社), pp. 328-336
- 35) 和泉真澄(2016)「ヒラリバー強制収容所の農業活動に見る日系アメリカ人の生存戦略」『移民研究年報』22号(日本移民学会), p. 5
- 36) ヒラリバー収容所での藤重に関する動向は, <http://search.ancestry.co.au>「Final Accountability Rosters of Evacuees at Relocation Center, 1942-1946 for Hajime Fujishige」(参照2018年8月2日)による。
- 37) ヒラリバー収容所の所内新聞「Gila news-courier」は英文と日本語の「比良時報」から成り, 通常1～5ページが英文, 後半の2～3ページは日本語で発行された。収容されているスタッフの手で編集し, 日本語版はガリ版印刷だった。週2～3日の発刊で, 貴重な情報源となった。アメリカ議会図書館サイト「LIBRARY OF CONGRESS」(<https://www.loc.gov>)から閲覧できる。
- 38) 前掲「比良時報」1944年6月13日付6面に「お礼 藤重家」としてワシントン D.C へ転住する告知が掲載されている。
- 39) 森田幸夫(1970)「マッカラン＝ウォルター移民帰化法案(1952年)と在米日系人」『同志社アメリカ研究』6号(同志社大学), p. 65
- 40) 吉岡豊輔(1913)「万国体育競技概況」『偕行社記事 第461号付録』(東京偕行社)
- 41) 林 二輔(1913)「体操並びに体育」『戦友 第28号』, 同(1914)「国民の体育に就いて」『後援 第135号』
- 42) 東京朝日新聞1913年3月22日付7面
- 43) 財団法人講道館(1988)「わがオリンピック秘録」『嘉納治五郎大系 第8巻』(本の友社), pp. 352-378
- 44) 運動世界社(1913)「三島選手のオリンピック競技会実見談」『運動世界 1913年3月15日号』, pp. 24-32
- 45) 三島弥彦(1913)「オリンピックゲーム参列の記」『中学世界 1913年5月号』, pp. 54-68
- 磯部卓三・栗原 理(2017)『愛の教育者 鶴虎太郎』(書肆クラルテ)
- 伊東 明(1965)「オリンピック大会関係図書解題①」『新体育 第35号』1965年5月号(新体育社)
- 内海和雄(2012)『オリンピックと平和—課題と方法—』(不昧堂)
- 運動世界社(1913)「三島選手のオリンピック競技会実見談」『運動世界 1913年3月15日号』
- 大竹市役所(1970)『大竹市史 本編第2巻』
- 大竹小学校創立百周年記念誌編集委員会編(1973)『百年のあゆみ 大竹小学校百周年記念誌』大竹市・大竹市教委
- 大森兵蔵(1912)『オリンピック式陸上運動競技法』(運動世界社)
- 加藤新一編(1961)『米国日系人百年史』(新日米新聞社)
- 学校法人日本体育会(1973)『日本体育会日本体育大学八十年史』
- 学校法人広陵学園(1994)『広陵百年史』
- 北 政巳(1993)「スコットランド海運企業史(3)」『季刊創価経済論集』23号(創価大学)
- 木下秀明編(1981)「体育・スポーツ書解題」(不昧堂出版)
- 広陵学園90年史編纂委員会(1986)『目で見える90年の歩み』(学校法人広陵学園)
- 広陵中学校(1912-13)校友会雑誌『広陵 第2号, 第3号, 第4号』
- 佐山和夫(2011)『箱根駅伝に賭けた夢』(講談社)
- 佐山和夫(2017)『オリンピックの真実』(潮出版社)
- 財団法人講道館(1988)「わがオリンピック秘録」『嘉納治五郎大系 第8巻』(本の友社)
- 島田正士編(1980)『大正時代の体育・スポーツ第1集』(さつき書房)
- 白井 昇(1981)『カリフォルニア日系人強制収容所』(河出書房新社)
- 大日本体育協会編(1936)『大日本体育協会史 上巻』(1983年復刻版, 第一書房)
- 中村哲夫(1986)「大森兵蔵の体育論」『三重大学教育学部研究紀要』47号(三重大学)
- 日米新聞社(1914)『日米年鑑』
- 日本体育会(1909)『體育』189号
- 日本体育協会(1963)『日本体育協会五十年史』
- 長谷川孝道(2013)『走れ二十五キロ マラソンの父 金栗四三』(熊本日新聞社・熊本陸上競技協会)
- 浜田幸絵(2010)「戦前日本のオリンピック」『コミュニケーション科学 (32)』(東京経済大学)
- 林 二輔(1913)「体操並びに体育」『戦友 第28号』(帝国在郷軍人会本部)
- 林 二輔(1914)「国民の体育に就いて」『後援 第135号』(帝国軍人後援会)
- 広島県(1993)『広島県移住史 通史編』
- 正木良一・橋岡通雄共著(1960)『大井包高』(大井包高刊行会)
- 三島弥彦(1913)「オリンピックゲーム参列の記」『中学世界 1913年5月号』(博文館)
- 水谷 豊(1986)『白夜のオリンピック 幻の大森兵

参 考 文 献

- 朝日新聞百年史編修委員会(1990)『朝日新聞社史 明治編』
- 有山輝雄(2013)『情報覇権と帝国日本Ⅰ』(吉川弘文館)
- 和泉真澄(2016)「ヒラリバー強制収容所の農業活動に見る日系アメリカ人の生存戦略」『移民研究年報』22号(日本移民学会)

蔵をもとめて』(平凡社)

森田幸夫(1970)「マッカラン＝ウォルター移民帰化
法案(1952年)と在米日系人」『同志社アメリカ
研究』6号(同志社大学)

山本邦夫(1970)『陸上競技史 明治編』(道和書院)

吉岡豊輔(1913)「万国体育競技概況」『偕行社記事
第461号付録』(東京偕行社)

新聞・雑誌

「藤重教諭の渡欧」芸備日日新聞 1912年5月26日付
1面

「藤重教諭の渡欧」中国新聞 1912年5月26日付2面
「オリンピック・ストックホルム大会関連記事」

東京朝日新聞 1912年6月29日～7月21日付各5面

大阪毎日新聞 1912年7月14日～8月22日付3, 5面

読売新聞 1912年7月13日～8月3日付3面

萬朝報 1912年7月7日～7月25日付1面

「講演会の況盛」桜府日報 1912年11月12日付3面

「三島選手帰国 欧米視察談」大阪朝日新聞 1913年
2月7日付 5面

「黒紗の未亡人 大森兵蔵氏追悼会」東京朝日新聞
1913年3月22日付 7面

「藤重氏の結婚」桜府日報 1913年3月28日付3面

「日本小学校卒業式」桜府日報 1915年3月4日付3面

「明治に広島からオリンピック視察」中国新聞 1984
年4月16日付 23面

「三島選手のオリンピック競技会実見談」運動世界
1913年3月15日号

「オリンピックゲーム参列の記」中学世界 1913年5
月号

「ストックホルムの旭日」中央公論 2012年8月号

閲覧サイト

国立国会図書館デジタルコレクション

<https://dl.ndl.go.jp/>

消費者物価計算機

<https://yaruzou.net/data-jpn-cpi-inflation-rate>

アメリカ議会図書館「LIBRARY OF CONGRESS」

<https://www.loc.gov>

アンセストリー・ドットコム

<https://search.ancestry.com.au/>

ストックホルム大会公式報告書(スウェーデンオ
リンピック委員会) THE SWEDISH OLYMPIC
COMMITTEE (1912) 「THE OFFICIAL REPORT
OF THE OLYMPIC GAMES」

[library.la84.org/6oic/Official Reports/1912/1912.
pdf](http://library.la84.org/6oic/Official%20Reports/1912/1912.pdf)